研究者として過ごした世界6ヶ国

若　者

菅　野　優　美*

Things I leaned from living on almost all continents

Key Words：Research, Life, Communication

はじめに

私は日本で学位を取った後、カナダ、イギリス、アメリカ、南アフリカ、スペイン、と大抵の大陸に住んできました。子供の頃から色々な国に住んでみたい、という夢があったので、好きな研究をしながら、この夢が実現できると知ったときは、自分はなんてラッキーなんだと思いました。阪大に着任した後も、海外出張で未だ行ったことのない国に滞在することを楽しんでいます。ここでは、私の海外経験から学んだこと、印象に残ったことなどを書いてみようと思います。

それぞれの国で学んだこと

私が大学院で学んだことは、論文の書ける研究者になるためのエッセンスでした。それは興味のある分野から必ず論文が書けそうなトピックを選んで、ひたすら計算することでした。計算のしすぎで腱鞘炎になることは研究室の友達の間では自慢でした。学位取得後はまず、カナダに行きました。受入教授はチャレンジ精神旺盛な人で、ほぼ確立した理論に対しても敢えて代替理論を提案する人でした。私がそこでいきなりショックを受けたのは、私がセミナーをした後、受入教授に「トラペに書く式は、多くても3つまでにしようね」と言われたことでした。大事なのは計算ではなくアイディアの部分だと。私のそれまでのプレゼンテーションは、式だらけでした。学生時代は、式を見れば分かるでしょ？というのが暗黙の了解でした。さらに驚いたのは、受入教授に「この問題解ける？」と問題を渡されて、解いて持って行くと、翌日論文になっていた事です。「計算チェックはしないんですか？」と聞くと、「予想通りの結果が出たから良い」と言われました。読んでみると、小説のような論文に出来上がっていました。学生時代は論文もプレゼンテーションも式で埋め尽くし、英語に関してはワンパターンな語彙を使いまわしていただけだったので、論文には文章力、プレゼンテーションでは話す力が必要だということを学びました。

ある時、それまでうまく行っていた受入教授のアイディアに欠陥があることが判明しました。その日は1日、今まで見たこともないくらい落ち込んでいる姿を目にしました。それでも、翌日からはいつも通りに、元気に精力的に研究している姿を見て、研究者には立ち直りの早さと、精神力の強さが必要であることを学びました。

子供の頃、海外に住めば、寝ている時の夢も自然に英語になる、という話を聞いて、海外に住めば、英語が流量に話せるようになるんだと思っていました。実際に住んでみて、確かに夢の中の会話は英語になりました。でもそれは単に日常生活がそのまま夢に出てきただけでした。相手の会話をうまく聞き取れないで困っていたり、言いたいことをうまく伝えられずに苦しんでいる夢でした。

カナダの後はイギリスに行きました。受入教授は私が学生の頃から憧れていた女性研究者でした。エネルギッシュで、とても頼もしい人でした。イギリスの研究の仕方は日本と似ていて、計算重視でした。受入教授は自分で必ず計算をする人で、お互いに計算結果をチェックしました。こういう進め方は慣れ

* Sugumi KANNO
京都大学大学院　理学研究科　物理学・宇宙物理学専攻　博士後期課程修了
現在、大阪大学大学院　理学研究科　物理学専攻　助教　理学博士
TEL：06-6850-5342
FAX：06-6850-5341
E-mail：sugumi@het.phys.sci.osaka-u.ac.jp

ていたので大筋の研究はとてもやり易かったです。苦労したのは、イギリス英語でした。イギリス英語は日本人にとって聞き取りやすいのですが、教科書に出てくるような言い回しをしてくれません。相手に気を使うために、直接的な言い回しを避けるのです。さらに会話にはイディオムがやたらと多く、直訳すると意味が全く分かりません。これは物理の議論にも影響しました。計算なら理解し合えるのですが、それ以上の議論が出来なくて悩みました。それでも受入教授は感が鋭く、私が会話でもがいていると、言いたいことをちゃんと察知してくれました。この頃から何かが吹っ切れた気がします。ブロークンで良い、という開き直りです。低い語彙力でも話をすれば、相手がちゃんと補って理解してくれるということが分かったのです。

次に行ったのはアメリカです。私の専門は宇宙論ですが、宇宙論に興味を持ったきっかけは、中学生の頃見たNHKの番組でした。私たちの宇宙はどうやって生まれたのかを解説していました。番組ではNHKの取材班がアメリカに行って専門家に解説をしてもらっていたのですが、そこで解説をしていた人が、私のアメリカでの受入教授でした。昔から憧れていた人なので、最初は気後れしました。コミュニケーションを取っているうちに、怖い人ではなさそう、と思うようになり、さらに慣れてくると、子供っぽい人だということが分かってきました。私が臆することなく、気軽に会話や議論ができるように気を使ってくれたのかもしれません。

研究室のメンバーは1日中、食事の時までマルチバースの話をしていました。マルチバースというのは、ユニ（1つ）ではなくマルチ（たくさん）の宇宙のことで、私たちの宇宙は、実はたくさんある宇宙の中の1つにすぎない、という描像です。この描像は宇宙論やストリング理論で予言されています。私は学生の頃、マルチバースに興味があったのですが、周りからマルチバースにはあまり手を出さない方が良い、と教えられていました。哲学がどうしても絡んでくるので、客観的な論文が書きにくいためです。アメリカに行ってまず驚いたことは、マルチバースの議論をひっきりなしにしている、ということでした。マルチバースを議論するには、自分の哲学とアイディアが必要になります。学生の頃、そういう訓練をしていない私は、何をどう考えたら良いのか分かりません。計算に頼らずに、それまでの自分の知識と研究経験から、議論を通してアイディアを出していく研究方法があることを学びました。

アメリカの後は南アフリカに行きました。人生で一度は南半球に住んでみたいと思っていた夢が実現できました。南アフリカの研究室のメンバーは、ほとんどがイギリス人かアメリカで研究をしていた人たちなので、計算重視の人もいれば、アイディアを求めて常に議論をしたがる人もいました。公用語は英語なので、研究はやりやすかったです。南アフリカに行って、一番印象に残ったのは、研究者としてのステータスの違いでした。受入教授は夫婦の2人でした。共働きのおかげもあるのかもしれませんが、彼らが住んでいる家は、プール付きの広い庭がある家でした。庭からは、テーブルマウンテンが眺められて、夕日に照らされたテーブルマウンテンは絶景でした。研究者のように裕福な生活を送る人もいれば、家もない貧しい人たちも大勢いました。貧富の差がとても激しいのです。日々、生活に苦しんでいる人たちの側には、贅沢に暮らしている人たちがいます。こういう状況が犯罪を生みやすくするのかもしれないな、と思いました。安全な国にするには、国民の豊かさを均す必要がある、と。周りも苦しんでいれば、自分が苦しくても仕方ない、と思わせることができます。また、私が南アフリカにいるときに、ネルソン・マンデラが亡くなりました。普段は南アフリカのニュースを扱うことのない日本のネットニュースでも頻繁に取り上げられているのを見て、いかに偉大な人だったのかを知りました。研究室の南アフリカ出身の友達に、ネルソン・マンデラが亡くなってやはり悲しいかどうか聞いてみました。「マンデラはスキャンダルが多かったから好きではないし、悲しくもない」と言われました。歴史的に偉大な人物というのは、結構こんなものなのかもしれない。偉大なエピソードだけが後世に語り継がれて行くものなのだろうな、と思いました。

南アフリカに住んだことがある、と言うと安全性のことを聞かれます。どこの国に行ってもそうですが、現地の人が危ない場所や、避けた方が良いことは教えてくれます。それに気をつけていれば何の問題もありません。日本では、海外で事件に巻き込まれて行方不明になる日本人女性のニュースが取り上げられます。名前、顔写真、年齢、職業、学歴、交

友関係、ありとあらゆる個人情報がメディアで流れるのを海外から見ていて、とても怖かったです。海外で事件に巻き込まれるのだけは何としても避けなければと思いました。

南アフリカの次はスペインに行きました。スペインの受入教授は前からの友達だったので、コミュニケーションや議論は慣れていました。ジョークが好きな人で、ジョークで相手を笑わせて、リラックスさせてくれます。スペインの研究室はとても大きく、素粒子、宇宙、天文、量子情報を専門とする人たちが同じ研究室に属していました。ここまで様々な分野の研究者が1つの研究室に所属している場所は、なかなかないと思います。私は宇宙初期にあったと思われている他の宇宙との間の量子エンタングルメントに夢中だったので、量子情報理論の分野のことを色々教えてもらいました。その際、しばしば自分の研究の説明をする必要がありました。モチベーションから始めて、何がしたいのか、何が問題なのかを式を使わずに、わかりやすく説明しなければなりません。他の分野の人に自分の専門の話をするにはどうしたら良いかを常に考えるようになりました。

研究室のメンバーは、スペイン人の他にはEU圏内出身の人が多かったです。EU圏内の人は、パスポートなしで自由に他の国を行き来できます。EUROのおかげで、通貨のややこしい手続きも不要です。彼らにとって、EU圏内は自分の国の中のような感覚でした。これは研究者にとって理想的な世界でした。スペインに住んでみて、ヨーロッパ諸国が1つのEUになったということが、どれだけ凄いことなのかを実感しました。

おわりに

大抵の大陸に住んだ、という話をすると、どこの国が一番良かったか、と聞かれます。私が今まで住んだ国はどこもとても良かったです。順位はつけられません。住んでみると、それまで知らなかった良い面がたくさん見えてきます。久々に出張で訪れると、ノスタルジアに浸ります。これからもまだまだ行ったことのない国を訪れて自分の視野を広げていきたいと思っています。